

琉球大学学術リポジトリ

琉球・中国交流史研究

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 上里賢一</p> <p>公開日: 2010-01-22</p> <p>キーワード (Ja): 琉球と中国, 福建省, 交流史, 冊封と進貢, 久米村, 民間宗教</p> <p>キーワード (En): Ryukyu and China, Fujian Province, History of Exchange, Inverstiture and Tribute, Kume Village</p> <p>作成者: 上里, 賢一, 金城, 正篤, 池宮, 正治, 西里, 喜行, 高良, 倉吉, 赤嶺, 守, 長部, 悦弘, 豊見山, 和行, 星名, 宏修, 石崎, 博志, 王, 耀華, 徐, 恭生, 謝, 必震, 方, 宝川, Uezato, Kenichi, Kinjo, Seitoku, Ikemiya, Masaharu, Nishizato, Kikou, Takara, Kurayoshi, Akamine, Mamoru, Osabe, Yoshihiro, Tomiyama, Kazuyuki, Hoshina, Hironobu, Ishizaki, Hiroshi</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15029

文化交流拠点としての福州柔遠駅

—王登瀛『柔遠驛草』を中心にして—

上里 賢一

はじめに

福州の柔遠駅は、福建省舶司が泉州から福州に移設された明の成化年間に、朝貢国の中国における宿泊滞在の利便のために設けられたと言われる。しかし、福州への琉球船の入港は市舶司移転前の1420年代からあり、1430～40年代には、泉州の来遠駅と並んで福州に柔遠駅があったと推測される事実もあり、実体の方が先行していた。^{〔*1〕}

中国の国内には、駅亭・駅舎などの宿駅や官吏の往来や公文書の運送をつかさどる機関があり、外国の使節の宿泊施設としては公館があった。福州の柔遠駅は、駅亭と公館の性格をあわせ持った施設ということができる。泉州にあった来遠駅が、周辺の東南アジアの朝貢国との兼用施設であったのに対し、福州の柔遠駅はもっぱら琉球の使節が使用した。柔遠駅のことを、一般に「琉球館」と呼んでいるのは、施設の実際の使用状況を反映したものであると言える。

進貢船など琉球からの使節を乗せた船は、閩江河口の五虎門を過ぎると、潮の干満を利用して閩江を遡る。閩安鎮で乗組員や搭載貨物のチェックを受けたあと、鼓山を右に仰ぎながら福州城内に進み、琉球館に到着し旅装を解いて落ち着くことになる。

柔遠駅は、琉球の使節の宿泊所であり、北京へ上る使節の出発地点である。また、河口通事（土通事）という福建側にいる通訳と協力して、牙行と呼ばれる中国商人を仲介者として中国の品物を購入したり、持ち込んだ品物を販売する商貿易の場所でもあった。^{〔*2〕} 勤学と呼ばれる琉球の留学生もここに滞在し、儒教などの習得をはじめ、医術や工芸技術などを学ぶ拠点であった。清末には、「脱清人」と呼ばれる人たちが、ここを活動拠点として嘆願要請活動を展開した。また、冊封使節もここから琉球に渡り、またここに帰ってきた。

柔遠駅（琉球館）の役割と表情は、実に多彩である。そこに宿泊する琉球人も役人、留学生、船乗など多様であり、出入りする中国人も河口通事や牙行などの

〔*1〕 明代成化年間の福建省舶提挙司の福州移転については、東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』（『東恩納寛惇全集』第三巻 昭和54年 第一書房）、小葉田淳『中世南島貿易史の研究』（昭和14年 日本評論社）、徐恭生著／西里喜行・上里賢一訳『中国・琉球交流史』（1991年 ひるぎ社）等を参照した。

〔*2〕 土通事と牙行については、西里喜行「中琉交渉史における土通事と牙行『球商』」（『琉球大学教育学部紀要』第50集 1997年 所収）を参考。

他に、勤学の師匠や詩友など現地の知識人もいる。

さまざまな顔を見せる柔遠駅（琉球館）を舞台にして、実際に琉球からの使節や留学生との交流の様子を詩文にしたものが、ここでとりあげる『柔遠驛草』である。これは、琉球と中国の文人の緊密な絆の産物であり、歴史のある瞬間の美しい1コマを切り取った様な鮮烈なイメージを伝えてくれる。これは、たんに文学として鑑賞して終わるものではなく、中国と琉球の交流史の内容を伝える貴重な歴史資料でもあると言えるものである。

1 福州柔遠駅の概要

「柔遠驛草」は、樓東十景と樓西十景の二つの詩題をもつ二十首からなるものである。いうまでもなく樓東十景は、柔遠駅から東方をのぞんだものであり、樓西十景は西方をのぞんで詠まれたものである。作品の内容を知るためにも、柔遠駅が福州の何処にあり、どの様な建物だったか、その概要をあらかじめ把握しておく必要がある。

福州の柔遠駅の位置や建物の配置等については、『福建市舶提挙司志』の「署舎」の項目の次の記録がよく引用されている。^{〔*3〕}

前廳三間	兩邊臥房共八間
後廳五間	兩邊夷稍臥房共二十七間
貳門三間	兩邊夷稍臥房共六間
守把千戸房	兩邊共十間
軍士房二間	大門一間

この記録によれば、柔遠駅の建物は前庁、後庁、貳門、守把千戸房、軍士房、大門からなっていた。大門を入ると警護の兵員の詰所である守把千戸房、軍士房があり、ここを過ぎて貳門がある。貳門をくぐると前庁、後庁という館駅の中心をなす建物に通じる。前庁、後庁には、両側に臥房（寝室）という空間があるが、面白いことに貳門の左右に三間ずつの臥房が設けられていることである。琉球の使節は「夷稍臥房」に宿泊したと思われるから、ここは、警護以外の中国側の役人たちが利用したのだろうか。

高岐の記録は、明代のものである。柔遠駅は明・清代を通じて幾度も改修されており、敷地内の建物も時代と共に増えている。例えば、修理・改修については、小葉田淳が『中世南島通交貿易史の研究』の中で康熙元年2月9日付けの尚質王

〔*3〕 高岐『福建市舶提挙司志』「署舎」（嘉靖34年刊 民国28年（1939）復刻本参照）。

の次のような咨文を記録している。^{〔*4〕}

於福者水關外、設柔遠驛壹所、中有頭門・儀門・大堂・月臺・左右兩傍房舍參拾貳間皆脩整完固、使貢臣有樓止之、地方物無濕壞之虞、又於附驛曠地、周圍砌垣根牆、日夜巡邏、使居民貢使無相混雜、嫌隙不生、和好永固規制甚弘、體恤至曠也、查自戊子兵火本驛大堂・頭門・儀門頽爲曠土、兩傍房舍、僅存壹拾陸間、居止淺窄、屋宇荒涼、每至風雨之夕、員伴滴漏不堪、方物傍惶恐濕、

これによれば、柔遠驛は福州の水関外にあり、頭門・儀門・大堂・月台・左右兩傍房舍等が整然と建っていた。『福建市舶提举司志』の記録とは、完全には一致しないが、二つの門と兩傍房舍などは、同じように作られていたらしい。それが、「戊子兵火」（順治 5 年の戦乱）によって、「大堂・頭門・儀門頽爲曠土」というように焼失し、わずかに兩傍の房舍が十六間残っただけで、使節の生活や方物の保管にも支障をきたしている。

深澤秋人氏は、小葉田氏が引いた尚質王の咨文を『歴代宝案』によって紹介している。これによって、小葉田氏の引用文を訂正できるし、省略されている後半部分を補うことができる。さらに、『歴代宝案』によれば、小葉田氏が「康熙元年二月九日」付けとしている尚質王の咨文が「康熙五年二月九日」であることも確認できる。^{〔*5〕}

尚質王の咨文の趣旨は、じつは後半の方にある。深澤氏の要約に従えば、戊子の兵火で甚大な被害を被り、荒廃した状態にあり、「渡唐役人は風雨をしのぐこともままならず、『方物』の格護にも支障が生じていた。加えて館内には靖藩の兵が駐屯し、儀門の内外の施設は兵丁の房屋となり、渡唐使節と『雑処』する状態であった。琉球国王は『方物』の格護がままならないこと、靖藩の兵とのあいだにトラブルが発生することを懸念し、琉球館を移転するか、現在地に再建すると同時に『新規制』することによって、渡唐使節に対する待遇の改善を要望している。琉球館は上奏文による懇願がおこなわれた二年後に再建される」。

尚質王の咨文に言う「戊子兵火」・「靖藩の兵」とは、明・清交替期の戦乱である。この時期には、柔遠驛も大きな被害を受けていたことが分かる。

その後、政治状況が落ち着くとともに、琉球と清国との交易が活発化し、柔遠驛の安定した機能を発揮していた頃の記録に、程順則の一連の文章がある。それは、かれの著作『指南広義』に掲載されている「河口柔遠記」、「柔遠驛土地祠記」、「柔遠驛崇報祠」等の記録である。これらの文章は、『柔遠驛草』の作品の成立時

〔*4〕 小葉田淳『中世南島通貿易史の研究』（昭和 14 年 日本評論社）P,225。

〔*5〕 深澤秋人「福州琉球館の構造と改修」（『琉球王国評定所文書』第十六巻 2000 年 浦添市教育委員会）。尚質王の咨文については、『校訂本 歴代宝案』第一冊 P,464・1-14-10 文書参照。

期とほぼ同じ時代のものであり、同時代資料として相互に照らし合う関係にある。ここでは、「河口柔遠記」の記録にしばって、この時期の柔遠駅の様子を見ておくことにする。^{〔*6〕}

河口柔遠驛記

驛設於福建省城水關外、瓊河之口、所以貯貢物停使節也、舊制四圍砌墻、門臨大街、設照墻木柵、官廳在兩井中間、兩廂樓屋各十三門、天妃土地各有祠、規模弘敞、自靖藩調閩後、前面侵爲兩鎮營房、地遂促及甲寅之變、折毀幾盡、僅存官廳一所、歲丁巳我國遣官遠探、適聞奉命大將軍和碩康親王、統禁旅入仙霞、民皆按堵、越明年奉貢如舊、時諸當事以館驛傾圯、恐褻貢典、兼憫使臣露宿、特委郡司馬蘇公、重新起蓋、大門儀門、併兩邊廂樓各十一間、儀門外視館公署一座、廳後天妃祠堂三小間、雖建置不異於初、然非曩日舊址矣、辛未年予接貢留邊、因思有土居人、不可無神以守之、有臣死事、不可無位以安之、即於天妃祠傍、左祠土地正神、右立故臣木主、各爲文以記之、壬申颶風大作、廂樓倒塌、墻垣崩頽、復請於當事、委官重造廂樓各十間、垣庸修築之、續因進貢兩船、人多屋少、自蓋樓屋四小間於廳西之側、(後略)

この記録によれば、柔遠駅は福建省城水関外の瓊河の河口にある。貢物を保管したり、使節が宿泊する施設となっていた。この時期には、駅館として利用されるとともに、明代の進貢使の役目も兼ねていたことがわかる。

旧時と同じく周囲に垣根をめぐらし、官庁を中心にしてその両側には天井（中庭）があり、それを挟んで両側にそれぞれ十三門（間か）の楼屋がある。敷地内に天妃・土地祠があり、館駅の規模は広大である。

明・清交替期の戦乱による荒廃と、郡司馬蘇公による再建のことが述べられる。この時大門・儀門・両辺廂楼各十一間、儀門外の視館公署一座、天妃祠堂三小間等が造られた。

その後、程順則は辛未年（康熙 30 年・1691）、接貢使節の存留通事となって福州に来たが、その時すでに再建から 20 年経って老朽化していた。その翌年（康熙 31 年）の台風で廂楼や垣根が壊されたので、廂楼各十間と垣根を作ってもらった。さらに、進貢船が二隻となり、使節の数が増えて部屋が足りないため、楼屋四小間を西側に増築した。

程順則の記録をもとに康熙 30 年代（これは、後に見るように『柔遠驛草』の成立した時期である）の福州柔遠駅の概略を記すと次のようになる。

〔*6〕 程順則『指南広義』球陽研究会講座テキスト本 1970 年。なお、柔遠駅の変遷については、梅木哲人氏の「福州柔遠駅と琉球・中国関係」（『中国福建省・琉球列島交渉史の研究』第一書房 1995 年 所収）を参考にした。

場所	福建省城水関外、瓊河の河口
敷地	正確な敷地面積は明らかでないがかなり広い。周囲を木の柵で囲む。
利用目的	貢物を保管したり、使節が宿泊する施設として使用。
建物の配置	大門 儀門 官庁舎と両側にそれぞれ 11 間の楼屋（後 10 間となる） 儀門外の視館公署一座 天妃祠堂三小間 土地祠 崇報祠 楼屋四小間（西側の増築部分）

2 『柔遠驛草』の概略

王登瀛の『柔遠驛草』は、^{〔*7〕} その詩集にある王登瀛自身の序文と林潭（号二恥）の序文をもとにして、その成立時期をはかることができる。林潭の序文は「康熙甲戌歳小春」に書かれているから、1694年（康熙33年）、琉球では尚貞王26年にあたる。作品は後で見るように、それ以前の康熙20年代に制作されたものが大半をしめる。

作者の王登瀛という人物については、「晋安」の人であるという以外には、詳しい伝記は未詳である。作品の内容を深く分析するためにも、人物については、今後あらゆる手立てを尽くして調べる必要があることは言うまでもない。

『柔遠驛草』は、「柔遠驛草」と「柳軒詩艸」の二つの詩集が合わされて一冊になっているものである。ここでは、『柔遠驛草』の構成と収録されている作品の詩題を順を追って紹介することとし、その際、序文を含め「柔遠驛草」と「柳軒詩艸」の二つの詩集ごとに分けて、詩題ごとに通し番号を付すことにする。

①三山王登瀛序 ②林潭序

「柔遠驛草」

- ①樓東十景（鼓山聳翠・野寺聞鐘・飛閣流霞・長堤柳色・小圃荔香・遠川殘照・瓊水春潮・石橋夜月・江邊漁火・隴畔農歌）
- ②樓西十景（于山禪院・烏石凌霄・冶城畫角・雙塔雲封・金鷄古刹・鳳坂烟村・蓮峰挺秀・遠浦歸帆・平原野色・曲沼荷香）

「柳軒詩艸」

〔*7〕 使用したテキストは、日本国立公文書館所蔵の版本である。奥付けは無い。

- ①登劍津郡城樓 ②遊九峰遇雨口占 ③驛樓蚤秋 ④留別祝有定
 ⑤過嚴子陵釣臺 ⑥和汪西樵江樓秋咏 ⑦婁東寄懷王孔錫 ⑧送祝方儒
 歸海昌 ⑨姑蘇花朝寄懷祝有定 ⑩冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話
 和韻二首 ⑪和林二恥詠梅 ⑫同竺鏡筠陳元聲集飲驛樓陳魯水以紙屏索詩
 併書兼讀陳元聲題屏聲題屏詩句即席走筆賦和 ⑬同林二恥陳昌其張庶咸宴集
 仁山堂 ⑭十五夜坐雨 ⑮送鄭克叙歸中山 ⑯送陳魯水 ⑰送楊仲立
 ⑱送陳昌其之溫陵張元侯幕 ⑲寄汪西樵 ⑳春暮集飲周熙臣翠雲樓
 ㉑立秋後二日集蔡天水山樓坐雨得青字 ㉒同程素文毛子猷鄭克文陳楚水紅爾
 吉驛樓分賦 ㉓春仲喜林二恥竺鏡筠陳昌其集仁山堂話舊 ㉔送蔡祚菴入貢
 ㉕送梁得洲入貢 ㉖送程素文鄭克文入都 ㉗送金浩然歸中山 ㉘送周熙
 臣 ㉙送麻舜玉 ㉚懷梁得聲 ㉛寄程寵文 ㉜遙輓陳魯水

以上が、『柔遠驛草』として一冊にまとめられている「柔遠驛草」と「柳軒詩艸」の二つの詩集に収録されている作品である。「柔遠驛草」は、樓東十景と樓西十景の二つの詩題による二十首であり、「柳軒詩艸」は、三十二首である。合わせて五十二首だから、収録作品数は多いとは言えない。小さい詩集ではあるが、福州の柔遠驛の状況や、柔遠驛における琉球人と中国の詩人との交流の実体を知るうえでは、じつに貴重な内容を含んでいると言える。

なお、『柔遠驛草』に登場する琉球人について、福州へ渡った年の順に整理して文章末に付けておくことにする。まだ、調査中でその伝記に関する記事がすべて空白の人物もいるが、これについても、割愛せずに掲載しておくことにする。

3 『柔遠驛草』の内容

『柔遠驛草』の王登瀛と林潭の序文は、「柔遠驛草」と「柳軒詩艸」の二つの詩集を合わせた詩集全体の序文になっている。「柔遠驛草」と「柳軒詩艸」の二つの詩集に、別個に序文はついていない。これからすると、別々に出た詩集を合冊したのではなく、はじめから一冊の詩集として上梓されたものと見てよさそうである。

ここでは、王登瀛自身の序文を紹介しておく。

三山名勝甲於天南東、距郡治七里許、瓊河環繞、有柔遠驛樓建焉、蓋爲琉球上貢頓貯方物、居停行使也。歲甲戌余別業其樓、風晨月夕、得與金浩然・周熙臣・程素文・鄭克文諸子、憑眺江山。東則有湧泉石橋諸勝、西則有蓮峰雙塔諸奇。時而晨暎始開林鳥百囀落紅掩映松篁翠流、時而夕陽在江、石壁倒景、亂流奔蹙金碧萬殊。時而光風霽色、時而霧

湧雲蒸、時而野寺飛鐘、隱隱從樹杪而出。時而濤聲天籟、陣陣若山半飛來。時而層巒疊嶽、呈露春暉。時而一壑一丘、延留秋影、時而煙拖楊柳、雨洗芙蓉。時而谷口樵歸、江頭漁唱、因嘆寒燠陰晴變態非一、亭臺陵谷、今昔殊觀、賦二十首聊以紀勝。第愧蚯蚓之聲、不離塔砌間、難與野鶴唳天者比、雖然等聲耳。豈以鶴故禁蚓不鳴、各適而已。爰質同人以供噴飯。

三山王登瀛自識

この序文には、重要な情報が多い。柔遠駅の場所が示されており、それが「琉球上貢頓貯方物、居停行使也」として利用されていたこと。「歳甲戌余別業其樓」に見られるように、王登瀛が実際に「柔遠駅」で生活し、「得與金武浩然・周熙臣・程素文・鄭克文諸子、憑眺江山」したこと。その時の「柔遠駅」から眺めた東西の自然が、「柔遠駅草」の二十首として結実したこと等である。「歳甲戌」は、先に述べたように1694年（康熙33年）にあたり、林潭の序文が書かれた年である。この年、「余別業其樓」と述べているが、王登瀛が何日柔遠駅に泊まったかは明らかでないが、琉球人の宿泊施設によしんば一日といえども泊ったということは、その事実だけで、彼と琉球の使節との心のつながりの強さを示すものと言える。また、彼が柔遠駅に泊まった年が「甲戌」（康熙33年）の年と明確であるために、林潭の序文における「康熙甲戌歳小春」と合わせて、この詩集の成立時期を確定することができる。

次に、『柔遠駅草』に収録されている作品について見ていこう。最初は「樓東十景」と「樓西十景」である。樓は柔遠駅（琉球館）の中の建物であろう。柔遠駅からの眺望である。「樓東十景」の冒頭をかざる鼓山は、福州市のシンボリック的存在であり、以下閩江沿いの光景が詠まれる。「樓西十景」では、福州市内の于山と烏石山がとりあげられ、この二つの山に建つ白塔・黒塔（双塔）と、その周辺の田園風景が詠まれている。

「樓東十景」

- ①另削峯高未易攀 閩南第一舊禪關 晴光常散空江裏 黛色時深落照間
(鼓山聳翠)
- ②寺古煙深樹半遮 疎鐘聲裏月初斜 不知隔岸塵中客 幾逐離愁夢到家
(野寺聞鐘)
- ③憑虛一閣敞清秋 天半晴霞鎖落浮 多少梁園賓客賦 不知彩筆孰風流
(飛閣流霞)
- ④瀟灑時含惜別愁 青青眼底自風流 長條垂水休輕折 留與離人晚繫舟
(長堤柳色)

- ⑤ 嫣紅學得晚霞粧 名擅江南十八娘 但得冰心傾國士 漁陽驛騎不須忙
(小圃荔香)
- ⑥ 半着流霞半着煙 餘峰剩水共連天 凝眸疑是山陰道 尤似阿房賦一篇
(遠川殘照)
- ⑦ 清江如帶激滔滔 早晚衝潮兩岸號 最愛迴環青峭裏 高樓煙雨看漁舟
(瓊水春潮)
- ⑧ 溶溶月色映江皋 俯瞰寒流萬仞高 爲憶當年司馬筆 乾坤原不老青袍
(石橋夜月)
- ⑨ 曉起掀蓬煙雨前 晚來相聚荻蘆邊 微茫燈火明還滅 應羨浮家別有天
(江邊漁火)
- ⑩ 四郊春雨足平疇 處處歡呼卜有秋 莫道一犁非事業 歌殘萬頃綠煙浮
(隴畔農歌)

「樓西十景」

- ① 蘭若幽深傍碧空 晨昏鐘磬亂煙中 古來興廢知多少 獨有招提伴翠峰
(于山禪院)
- ② 對峙城南秀接天 嵯峨長椅五雲前 不知古洞丹砂竈 石液曾炊幾代煙
(烏石凌霄)
- ③ 郭外秋清艸未霜 角聲吹徹正淒涼 無端更落城頭月 惹起遊人幾斷腸
(冶城畫角)
- ④ 玲瓏雙塔俯層巒 影射天心奎壁寒 豈是間雲知獲法 時隨鐘磬繞欄干
(雙塔雲封)
- ⑤ 松參天半映滄波 古刹煙寒鎖薜蘿 貝葉翻殘黃葉落 梵音時帶白雲過
(金鷄古刹)
- ⑥ 鳳去林空落照餘 柴門斜帶晚山孤 臨風那得王摩詰 畫把煙光入畫圖
(鳳坂烟村)
- ⑦ 花高十丈映三台 紫萼紅粧雨後開 歷盡春秋常帶笑 可人猶在絕塵埃
(蓮峰挺秀)
- ⑧ 幾年客思付蒼葭 望斷前村幾暮鴉 莫道煙波非捷徑 片帆高挂夕陽斜
(遠浦歸帆)
- ⑨ 東風駘蕩百花和 紫陌紅塵樂事多 極目煙銷芳樹外 流雲浮水謾相過
(平原野色)
- ⑩ 香拂薰風幾曲荷 文鴛對對戲晴波 江南士女多輕薄 倡和皆爲白紵歌
(曲沼荷香)

次に『柔遠駢草』中の「柳軒詩艸」から、琉球人と関係の深い作品を拾って紹

介する。その際同一人物については、特に重要と思われるものについて参考程度に掲げることとし、重複して取らないことにする。本文を省略するものについては、その詩題だけ掲げることとする。

①登劍津郡城樓（省略）

②遊九峰遇雨口占（省略）

③驛樓蚤秋

忽見樓頭一雁過 漢南楊柳易磋跎 山浮嵐氣如將雨 水得煙光別有波
草閣風翻桐葉瘦 瓊川露白蓼花多 可憐歲々悲秋客 何處江千覓志和

④留別祝有定（省略）

⑤過嚴子陵釣臺（省略）

⑥和汪西樵江樓秋咏（省略）

⑦婁東寄懷王孔錫（省略）

⑧送祝方儒歸海昌（省略）

⑨姑蘇花朝寄懷祝有定（省略）

⑩冬夜同陳昌其王孔錫集梁得聲山樓夜話和韻二首

寂寂寒霜夜 蕭蕭鳥罷啼 雲歸峰失翠 煙抹樹全低
修竹開三徑 沙鷗白半溪 詩情與畫意 盡在驛樓西

古驛草萋々 嚴城烏夜啼 月憐山色淡 風剪雁翎低
短榻眠高士 疎鐘度遠溪 喜留銀燭在 相與話窓西

○陳昌其…陳元輔のこと。福州の学者で、程順則をはじめ琉球の留学生（勤学）の指導にあたり、程順則の『雪堂燕遊草』をはじめ、多くの琉球人の詩集に序文を寄せている。『枕山樓課兒詩話』をはじめ、『枕山樓文集』、『枕山樓詩集』等の著作がありその中に「中山自了伝」等琉球と関係の深い作品が数多く収録されている。

○王孔錫…この人物についての詳しい伝記は未詳。

○梁得聲…梁氏の十世国吉親雲上(1663～1702)。康熙24年～29年まで6年間、勤学として福州に滞在した。帰国後は書家としても活躍した。^{〔*8〕}

⑪和林二恥詠梅（省略）

⑫同竺鏡筠陳元聲集飲驛樓陳魯水以紙屏索詩併書兼讀陳元聲題屏詩句即席走筆賦和（省略）

⑬同林二恥陳昌其張庶咸宴集仁山堂（省略）

⑭十五夜坐雨（省略）

〔*8〕「吳江梁氏家譜」（『那覇市史 家譜資料二〔久米村系〕』769 ページ参照）。

⑮送鄭克叙歸中山

挾得幽燕壯士風 未幾又欲錦帆東 垂堤柳色依人媚 送客鶯聲帶露融
島嶼微茫煙火外 家鄉飄渺海雲中 從茲兩地同明月 好把相思寄遠鴻

○鄭克叙…字は士綸。鄭氏五世宮城通事親雲上（1661～1702）。康熙21年～24年まで4年間、勤学として福州に滞在。〔*9〕

⑯送陳魯水

湖海交遊解佩句 經年下榻寫心長 詩成一字推敲細 酒至千鐘戲謔狂
正喜絃歌調雅韻 忍聽驪唱動離腸 勿々別後如相憶 莫厭雙魚遠寄將

○陳魯水…陳氏三世其洙・幸喜通事親雲上（1667～1694）。康熙23年～28年まで6年間、勤学として福州に滞在。康熙31年には存留通事として福州に赴くなど、活躍はじめたが、康熙33年（1694年）5月に帰国し、翌月発病し、9月に享年二十八で死去した。『柔遠驛草』の最後の作品は、「遙輓陳魯水」と題するもので、哀悼の序を含む五言詩である。〔*10〕

⑰送楊仲立（省略）

○楊仲立…この人物についての詳しい伝記は未詳。

⑱送陳昌其之温陵張元侯幕（省略）

⑲寄汪西樵（省略）

⑳春暮集飲周熙臣翠雲樓（省略）

○周熙臣…周氏の三世新命・目取真親雲上（1666～1716）。康熙27年～34年まで7年間、勤学として福州滞り。翠雲樓は、彼の書齋の堂号。詩集に「翠雲樓詩箋」がある。〔*11〕

㉑立秋後二日集蔡天水山樓坐雨得青字（省略）

○蔡天水…この人物についての詳しい伝記は未詳。

㉒同程素文毛子翀鄭克文陳楚水紅爾吉驛樓分賦（省略）

○程素文…程氏の七世順性・古波蔵通事親雲上（1670～1702）。康熙30年から5年間、勤学として福州滞り。程順則の弟。〔*12〕

○毛子翀…毛氏四世士豊・和宇慶里之子親雲上（1673～1710）。康熙31年～36年まで7年間、勤学として福州滞り。〔*13〕

○陳楚水…陳氏三世其湘（1673～1721）。康熙31年～35年まで6年間、勤学として福州滞り。〔*14〕

○紅爾吉…紅氏十世永祺・伊指川秀才（1675～1702）。康熙32年～38年まで7

〔*9〕「鄭姓家譜」（同『前掲書』670～672ページ参照）。

〔*10〕「陳氏家譜」（同『前掲書』460ページ参照）。

〔*11〕「周氏家譜」（同『前掲書』381ページ参照）。

〔*12〕「程氏家譜」（同『前掲書』559ページ参照）。

〔*13〕「毛氏家譜」（同『前掲書』711ページ参照）。

〔*14〕「陳氏家譜」（同『前掲書』469ページ参照）。

年間、勤学として福州に滞在。〔*15〕

㉓春仲喜林二恥竺鏡筠陳昌其集仁山堂話舊（省略）

㉔送蔡祚菴入貢（省略）

○蔡祚菴…この人物についての詳しい伝記は未詳。

㉕送梁得洲入貢（省略）

○梁得洲…この人物についての詳しい伝記は未詳。

㉖送程素文鄭克文入都（省略）

○鄭克文…この人物についての詳しい伝記は未詳。

㉗送金浩然歸中山（省略）

○金浩然…金氏十世金溥（1668～1708）。康熙23年～28年まで6年間勤学として福州滞在。〔*16〕

㉘送周熙臣（省略）

○周熙臣…㉔の注参照。

㉙送麻舜玉（省略）

○麻舜玉…この人物についての詳しい伝記は未詳。

㉚懷梁得聲（省略）

○梁得聲…㉔の注参照。

㉛寄程龍文

思君望名月 煙樹影離離 海外書難到 雲中雁故遲

夢生殘雨夜 愁滿落花時 念此滄溟隔 論心未可期

○程龍文…程氏七世順則・名護親方（1663～1734）。康熙22年（21歳）～26年まで5年間、勤学として福州滞在。さらに、康熙28年～30年（29歳）までの3年間、存留通事となって陳元輔の門下で学ぶ。留学を含めて5回中国にわたっている。この間、福州の柔遠駅に土地祠、崇報祠を建てている。詩人としても優れ、琉球最初の漢詩文集『中山詩文集』を編纂している。〔*17〕

㉜遥輓陳魯水

客夏驛樓、陳子告歸、離觴一舉、兩淚交頤、戀不忍舍、予謂陳子曰、古道交情、雖千里可同堂、異日再奉使至、握手話舊、當不遠也、詎意言旋未幾、忽爾仙逝、予聞中心愴然、率爾成韻、用寫悲懷、併以寄弔云、

憶汝瓊河上 經年共著書 誰知歸國去 竟卜夜臺居

海外音容邈 樓頭故舊疎 空留琴與劍 觸目淚垂餘

○陳魯水…㉔の注参照。

〔*15〕「紅氏家譜」（同『前掲書』205ページ参照）。

〔*16〕「金氏家譜」（同『前掲書』77～79ページ参照）。

〔*17〕「程氏家譜」（同『前掲書』545～559ページ参照）。

海外音容邈 樓頭故舊疎 空留琴與劍 觸目淚垂餘
○陳魯水…⑩の注参照。

おわりに

福州の柔遠駅（琉球館）に出入りしていた人物は多彩である。琉球からは進貢使、接貢使、請封使、進香使、護送使らが定期的あるいは臨時に派遣され、これらの使節と同行して留学生（官生や勤学など）も送られていた。首里や久米村の役人の他に、船の航海の技術者や船員及び護衛官などもある。これらの人物は、その年令も出身も階層も実にはばが広い。2年に1回派遣される進貢船の乗組員だけでも200名前後の人員になり、これに接貢船の乗組員ら加わると、福州の琉球館には、琉球の様々な階層の人物が200～300名も滞在することになる。一時的とはいえ、ミニ琉球村のような様相を呈したであろうことは想像に難くない。

中国側の人物も、出入国の管理や税務関係の役人、琉球館の護衛に当たる人や通訳の業務に当たる土通事、琉球から持ち込まれた品物や琉球側が買取りたい品物の斡旋等の便宜を図る土地の貿易商人などがいた。これらの人たちのほかに、ここで紹介したような学者や文人らもいる。かれらは、琉球から福州に学問の修行に来ている勤学と呼ばれる留学生の指導者やその友人たちである。このほかにも、柔遠駅の生活を支え、琉球の交易活動を支える上で関係のある業務に携わる現地の人たちが、日常的に出入りしていたものとおもわれる。

本稿は柔遠駅における琉球人と中国人との交流の実体について、とくに詩文の方面に焦点を当てて見たものである。内容は、福州において学習することを目的とする勤学と呼ばれる留学生と、その師匠と思われる王登瀛という人物との心の交流の記録である。

詩文の本文を省略したものも多く、作者や背景の説明も不十分で理解しづらい所もあろうが、紹介した序文や作品だけからでも、王登瀛の琉球の若い学生に寄せる温かい思い遣りや、師弟愛等は十分伝わってくるであろう。四季おりおりに、雨につけ風につけ、酒を携えて琉球館の学生を訪ねて夜おそくまで飲み、詩文を贈りあって楽しむ、たまには、そのまま泊まることもあった。これらの詩文をみていると、かれらが勉学をとおり友情を結び、詩文の贈答を重ねて師弟愛を育て、さらに人間的な温かい絆に発展させていったことがわかる。

王登瀛の『柔遠駅草』が、琉球館を舞台にして展開された琉球人と中国人の交流の様子を活写したものであることは誰もが認めるところであろう。この詩文を残した作者王登瀛については、引き続きその伝記について調べていかなければならない。また、琉球側の人物でその伝記がまだよく分からない者についても、今後調査を継続していきたい。

かぎやで風節と郭聖王

池宮 正治

(一)

昭和 11 (1936) 年東京の青年会館で、日本民俗協会の折口信夫らの招きで、琉球芸能界の総力を結集した舞台が実現した。立方に玉城盛重、上間正敏、金武良章、真境名由康、玉城盛義、親泊興照、儀保松男、新垣松含ら 16 人、地方は金武良仁、伊差川世瑞、古堅盛保、池宮城喜輝、仲嶺盛竹ら 8 人の錚々たるメンバーだった。この時の衝撃がいかなるものだったかは、雑誌『日本民俗』や伊波普猷や東恩納寛惇の記事、本田安次の記録を見ても頷ける。

次にこうした機会が訪れたのは、17 年の空白を経て、戦後も昭和 27 年になってからである。この年の 11 月 27 日から 30 日までの 4 日間、都内の飛行館ホール、蚕糸会館、日比谷公会堂などで公演、その概要は東恩納寛惇の『琉球新報』に掲載された「琉球舞踊東京公演感想」(昭和 28 年 12 月 6 日～8 日)において知ることができる(『東恩納寛惇全集』八巻所収 1980 年)。新垣澄子による揚作田、島袋光裕の老人踊、比嘉正義・宮城能造・宇根伸三郎・玉城須美男ら 4 人による磨踊、宇根・玉城による上り下り口説、宮平尚子・根路銘房子による伊野波節、宮平の諸屯、比嘉正義・大宜味小太郎・伊波清子・島袋初子のむんじゅる節、親泊・宮城の天川、島袋の八重瀬の万歳、盛義の高平良万などで、組踊には「銘苺子」と「女物狂」が上演されたようである。こちらのほうは、天女が親泊、姉妹を玉城秀子・牧志尚子が演じている。女物狂では人盗人を島袋が、狂女を親泊、子供を牧志がつとめた。公演は概ね好評だった。

なかでも東恩納は、島袋の老人踊について、「或は玉城(盛重一筆者注)以上ではないかとさへ思った」といい、「かぎやで風の悠揚迫らざる地につれて現れた大きな姿は」「そのしっかりした足の運び、目の配り、品の高さ、タテから見てもヨコから見ても、堂々として親方部以上の貫祿で、いかにも御前風と云ふ感じがした」と好感をもって評している。ところがこの後東恩納は思いがけない一文を書き添えている。

元来この踊は高砂の翁媪ではなく、唐の中書令郭子儀を象ったもので、郭子儀は玄宗の時代に義軍を率いて安祿山の反乱を平定した豪傑で、位人臣を極め、児孫数十人皆頭揚の地位に上り、八十歳の天命を完うした福祿寿かね備はった目度い人として、その像を正月掛けにするほどで、この踊もヨボヨボしたただの老人でなく、この位の気概と気品とを具備していなければならない。

「正月掛け」という言葉がよく分からないが、正月にこの画像を床の間などに掛けるということであろうか。それほどまでに親しまれていたという意味のようである。正月掛けについては、東恩納は他にも触れている。昭和 31 年 2 月 24 日琉球新報に発表した「福祿寿」(全集 8 所収)に「沖縄では、近年までも、福祿寿を目出度い限りに

考え、俗には『フクルクスー』と唱えて、久茂地辺の表具師は、田舎向きの『フクルクスー』を掛物に仕立てるのが専門であった。福祿寿三星が列んで立っている像で、これは本来、『天官賜福図』と称する正月掛で、これを一人の長頭老人に造り上げたのは室町期以後七福神信仰が現れてからの事であるらしく云々」とある。これだと福祿寿三像を具現したような郭子儀像を正月に掲げる風があったのではないらしく、福祿寿三星像のことであるらしく思える。もとより管見、狭い見聞ではあるが、郭子儀が絵像に掲げられ、また彫像に造りなして祭られる事実を知らない。言われるように、福祿寿は七福神の一つでもあるが、良く見かける姿は短身長頭で髭が長く、杖に経を結び、鹿か鶴を従えている絵像である。また福祿寿の「本来」が「天官賜福図」であるという点も、もう少し説明が必要だろう。筆者が見た「天官賜福図」は唐冠服姿の男性が「天官賜福」と書かれた巻物を広げている図である。これと郭子儀とかぎやで風老人踊とどう関係するのか、このあたりの説明が不可解なのである。

中国で郭姓の神格的な英雄といえば「郭聖王」がまず思い出される。福建閩南地域において影響力のある三大守護神に南安の郭聖王、恵安の青山王、漳州の開漳聖王陳元光の三神がよく知られている。福建思想文化史叢書の一冊として出た、徐曉望の『福建民間信仰源流』（1992年）によると、

郭聖王又の名は広沢尊王、これ南安の百姓の信奉する一つの神霊である。郭聖王は生前はただ一つの姓しかない無名の牧童だった。しかし元明清の時期に、彼の家庭、姓氏、経歴のすべてが神格化されてしまった。後の人が書いた郭聖王の略伝に、

神の姓は郭で、名は忠福といい、福建の南安の人である。祖先は周の文王の末弟で、虢に封ぜられたので虢叔と言われ、或いは郭公と曰われた。六十余代をへて唐の汾陽王となり、数代して嵩公に至り初めて閩に移り、再び華公に仕え泉州に分派して清溪に住み、代々令徳があった。神の父は性孝友で頑固でなく、常に清い泉と白い石の自然を逍遙し、母親が夢に感応して孕み、後唐の同光年中の二月二十二日清溪の故里で生まれた。生まれてすぐに神異があり、気性は豪偉、純孝を以て聞こえた。父が薨じて母はこれを携えて南安の十二都郭山に移った。山の名は神の名にちなんでいる。後晋の天福年間の初め、神が十歳のとき、忽ち酒を携え牛を牽いて山の頂上の古藤に登り神に生まれ変わった。この時、八月十二日で、里人もこれを奇異とした。(中略)そこで廟を立てて「將軍廟」といった(意識)。

とある。これと東恩納がいう郭子儀(697~781)とは時代も場所も違う。だが郭子儀は安史の乱を平らげて汾陽王になっていて、福建の郭聖王の祖先もかつて唐代に汾陽王になったとあり、つながりが無いわけではない。ただ福建の郭聖王は福祿寿を備えた人物というより、10歳で奇跡を示して神となり、廟に祭られて数々の靈験を現して、とりわけ泉州民の代表的な守護神になっている。台湾の阮昌銳の『中國民間宗教之研

究』(民国 79=1990 年)によると、郭聖王つまり広沢尊王の神誕は、上の郭聖王の誕生日である 2 月 22 日と、解脱した 8 月 22 日の 2 回になっている。つまり正月掛けではなく、福建や台湾ではこの二つの誕生日が神誕すなわち縁日で、この日に絵像や彫像が持ち出され、信者が供物や芸能を供して賑やかに祭る。郭子儀の方は汾陽群王になったことから汾陽王として祭られ、神誕も 4 月 26 日になっている。ここでも両者は別個の神であることが分かるのである。なかでも広沢尊王(郭聖王)は道教的な体型のなかでは地方行政の守護神として福建泉州移民の間で厚く信仰されていて、琉球にもたらされたとすれば、まず泉州出身の久米村人の間に広まったことであろう。しかしそうした形跡を我々はまだ確認していない。それに郭子儀が我が国の福祿寿の原型になったかどうか、これまたはなはだ心もとない。こうしたことがらが明らかにならないかぎり、琉球芸能の老人踊が郭子儀を象ったものとは到底いえないのではないか。

(二)

戌の御冠船(1838 年)の仲秋の宴では冒頭おもろ人数が登場しておもろを謡う。『おもろさうし』巻 22 の 47「御冠船の御時おもろ」に、

- 一 しよりおわるてだこが
おもいぐわのあすび
なよればのみもん
(又 ぐすくおわるてだこが)
(又 わしのはねさしよわちへ)

とあってこのおもろを謡ったことを示している。ところが、安仁屋本ではこのおもろに注して「尚穆様御冠船之御時よりおぎもかなしきと云おもろに成る」とある。つまり 1756 年以前まではこのおもろを冠船の時に謡ったというものである。尚穆代以降は、巻 22 の 44 の、

- 一 おぎもかなしきや
てだ かみ そろへてまぶりよわれ
又 みかうかなしきや

というおもろに変わったとの意味である。

おもろ人数は 7 人、おもろ主取の安仁屋掟親雲上は、黄味がかった緑青色の丸頭巾をかぶり、白い唐ひげをかけ、緞子の黒朝衣、金襴の帯、足袋という姿である。「白い唐ひげ」というところに主取が老体であることを示している。つづく天孫氏は唐黒髭をかける。

仲秋宴の次の重陽宴では冒頭老人老女による老人踊で始まる。老人は金糸入りの丸頭巾をかぶり、白い作りひげをかけ、緞子衣裳、金糸入り錦大帯、足袋をはき、杖をついて出る。老女は白髪垂れ髪で、長さじを垂らし、綸子の胴衣、襷取りかかん(下

裳)に紗綾の紅型つけ衣裳に、足袋、手には半月のクバ団扇をもって出る。そして口上を述べる。

アアタウト (ああ尊い)

ミウミノケヤベラニ (お申しあげます)

首里ガナシ天ノ (首里加那志天=国王が)

御願ノシヨワチャルゴトニ (御願いをなされたように)

唐ノ按司ガナシオタトコロ (唐の按司=冊封使お二方が)

ワタリメシヤウチャレバ (お渡りなされたので)

首里ガナシ天ノ (首里加那志天=国王の)

御祝ゴトバカリ (御慶事だけを)

カメニガヒシチ (神願いして)

ヲヤイリテアラバ (居りますれば)

ノウガナガラメカンデ (何か致しましょうと)

願テヲヤベル (願っております)

コノオホヂャト大アムヤ (この翁と媪は)

カホウナモノダヤベル (果報な者であります)

歳ヤ六十一 (歳は六十一を)

クイモドリへ (繰り返し返し)

タカヘリミヤベコト (二回見ましたので)

子孫マタ孫 (子、孫、曾孫)

ヤチ孫ヒキ孫揃テ (やしやご=玄孫、玄々孫、全部で)

三百三十人ヲヤベム (三百三十人います)

唐ノ按司ガナシノ (冊封使さまのために)

御目ザマシガラメカチ (退屈しのぎの舞台を興行して)

ミオメカケラムデ (お目につけよう)

手ソロヒ ヒシヤソロヒ (手を揃え足を揃え)

ヨシロテヲヤベモノ (参上しておりますれば)

コノ大ヂヤ大アム (この翁媪が)

御祝始メテ (御祝いを始めて)

子孫ニ能ハシメテ (子孫に芸能をさせて)

御目カケヤビラ、トウト (お目につけましょう。尊い)

歌 かぎやでふうぶし 老人老婦扇子踊

今日のほこらしやや (今日の喜びを)

なをにぎやな譬てる (何にか例えん)

蒼で居る花の (蕾んでいる花が)

露いきやた如 (露に会ったよう)

舞台興行の初番は上に見たように神格をもった老人の姿をして現れ、座をことほぐことから始まっている。重陽宴の翁媪も同じで、口上を述べ、かぎやで風節で「今日のはこらしやや」の歌詞で一舞するというのが定型だったのである。能では式三番といって「父尉（ちちのじょう）」「翁」「三番猿楽」の三番を一組にして演ずる。何れも老体の神が祝言、祝福の舞を舞うというものである。こうした老体の神が初めに登場し祝福をもたらす芸能は各地にあって、これが能の前身である猿楽に取り込まれて能の様式になったのだと言われている。江戸期に入って五番立の式楽になっても、初番の脇能には「老松」「白楽天」「放生川」「高砂」「弓八幡」「養老」などの「真ノ序ノ舞物」に、神霊祝言の能にも、その面影が残っている。

冊封使歓待の首里城の舞台は、能舞台と同様三間四方で、左手に橋懸、揚げ幕の奥の鏡の間に当たるところが楽屋である。謡座はなく、正面の紅型幕の後ろの幕内が地方の場所である。この紅型幕には紺地に竹梅鶴亀が描かれて松がない。松は舞台を御庭に仮設する前に松の大木を伐りだして立てることから始めているので、省かれているらしい。この松のことを銘苺子松と呼んでいる。組踊「銘苺子」を上演するとき天女が昇天する松の意であるが、舞台が撤去されるまで立てられ続けた。こうした松を舞台中央奥に立てる例は明治中期頃まで見られた。これは本土中世の小屋の伝統を引いたものだろう。能の鏡板の松もその流れと考えれば、銘苺子松は能からではなく、樹下の小屋掛けから出たもので、神霊が木を伝わって登場し舞台を寿ぐといった、舞台の方法と精神が共通していたように思われる。

地方の舞台も大抵アサギナーとか祭祀の広場を舞台にすることが多く、初めに百二十歳（はたち）になる「長者の大主」とか「にらいの大主」といった、呼称はさまざまだが、老体の者が子孫を引き連れて現れ、若衆・女・二才踊といった踊と、組踊を次々に供するといった趣向が見られる。例えば多良間では塩川では「長寿の大主」といい、対する仲筋では「福祿」という老人が登場する。写本の「忠臣仲宗根豊見親組」（仲筋村 1889年写）の初めに「福祿之言葉」がある。ヤマト言葉めいていてそれ程古いものではなさそうである。次のようなものである。

出たる者福祿と申もので御座る。さても当今の御仁徳には四海浪静にて、国も豊に民栄ひ、治る御代の有難や、はてのいへすのこなたまで、我が大君の国ならば、民のかまどはにぎわひて、人の姿もあたゝかに、福祿招くしるすとて、老も若きも皆勇め、躍ひ企ちましい、先壺番に若衆躍、二番に女躍、三番に二才躍、四番よりは色々の狂言で御座る。何にぞ御見ざましい事ではあらましにども、何れも様緩りと御見物被下ましい、そうと御なぐさめにならば、誠に有難き事で御座る。

一先御暇被下まし。

という口上が見られる。

(三)

かぎやで風節と「今日のほこらしやや」の歌詞は格別のものだった。今日ではかじやで風節と老人踊を開演一番の踊とするのが一般だが、近世の踊番組を見るかぎりでは必ずしもそうではなかった。八重山石垣市喜舎場永珣氏蔵の「躍番組」には、前半が尚泰王の冊封の祝上げとあって、冊封の諸式が無事完了した祝賀の番組、後半が王と王妃佐敷按司加那志が25才の生年祝いの時の踊番組である。いずれも尚泰王の冊封の翌年(1867年)のものだが、前半番組では冒頭、若衆こて節で「常磐なるまつのかはることないさめ」の歌詞で踊られている。後半番組では初めに若衆扇子踊、かぎやで風節と「けふのほこらしやや」の歌詞で踊られている。これはかぎやで風節で初番に踊っていることが確認される唯一の例である。つまり例外である。なお上の踊番組の後半四八番に女団扇踊「かじやで風節」が「けふの誇らしやや」で踊られている。この前1枚白紙が入っていることを顧慮すると別番組の初番であるらしい。

一般的に言って、初番に「かじやで風」「けふのほこらしやや」による老人踊は1例もなく、上のように、初番の若衆踊と四八番の女踊の各1例があるだけである。その他は「こて節」「常磐なる松の」の歌詞による若衆踊か女踊が初番の踊だった。その他、石垣長夫家の踊番組も若衆踊りだった。しかし多くは女こて節で踊られている。多少古い所では、『小唄打聞』(1790年)に「琉球唄 十四章」とあって「団踊／常磐なる松のかはることないさめいつも春くれば色どまさる」で始まっている。女団扇踊こて節である。これ以下「笠踊」「天河踊」「口説」「四つ竹」「花見踊」「打組踊」などがある。高木善助の『薩陽往返記事』には薩摩での見聞が記されていて、文政12(1829)年5月、島津若狭の領地大隅の重富郷の別荘鶴江崎で、家老川上久馬、用人調所笑左衛門らと饗応があり、琉球人による中国料理卓袱を用意し、琉球踊十二番を見ている。この時も初番は女団羽踊だった。歌詞は「常磐なる松のまぐて春くればみどりさしそへて色どまさる」で異なるが、この歌詞もこて節の歌なので、女踊こて節であることは疑いようがない。天保3(1832)年の江戸上りでは三つほどの踊番組が知られているが、いずれも女こて節である。沖縄本島の浜比嘉島に伝えられている古い踊番組でも初番は女こて節で、歌詞は「御慈悲あるよへど御万人のまぎり上下ん揃てあをぎをがむ」とある。

最後にもう一つ、石垣の大田静男氏から恵与された、識名家蔵の「躍番組寄」がある。大正5年に整理されたものだが、内容は近世の踊番組を集めたものである。はじめに、「錦芳氏頭宮良親雲上御招請之時」として、一番に「かゝてふう」節の「首里天加那志百年までちやうはり御万人の間切拝ですでら」の歌で「若書」(若衆)扇子踊で踊られている。次に「同人右同」とあって女扇子踊で赤馬ぶし三首が記されている。八重山では今日ごく普通に赤馬節でおどられているが、踊番組資料としては珍しい。以下簡略に従うとつぎのようになる。

・登野城村親廻之時躍之次第

一番、稲穂踊、さか本ぶし、歌詞「当年作たる米やすゝ玉ないさみ 御懸ふさいみ
しやる御代のしるし」

この歌は「作たる米節」の上句に別の歌の下句に付けて一首として賀歌としたものである。稲真積などを考えれば女踊かもしれない。

・野底村結願之時

一番、かゝてふう、歌詞「御願引合に願たごと叶て読でん尽さらん浜の真砂」

四番の扇子踊に「嘉慶は十五の午年（1810）在番尚氏宜野座の之（衍字）君の美御機を請下り」の文言があり時代が伺える。男女の別が分からないが、これまでの例からすると若衆踊であろう。

・錦芳氏頭石垣親雲上上国帰帆之時結願

一番、扇子、若衆おどり、かゝてふう、歌詞「首里天加那志百年までちやうはり旅
の行戻り拝ですでら」

琉歌集ではこの歌は旅のかぎやで風節で歌われる。

・申年登野城村親廻之時

一番、扇子

扇子踊とあるので若衆踊と推測される。

・戌年在番知念里之子親雲上帰帆、母親様歳日之時、八重山歌に躍り内之者共稽古させ罷登度段被御申付候付組立置候次第

女団おどり、赤馬ぶし

「御使者在番記」によると、知念里之子親雲上政行は道光 15（1835）年 5 月 15 日着任、同 18 年 5 月 17 日離任している。

若衆踊・かぎやで風節で踊られるものが幾つもあるが、まず「今日のほこらしやや」の歌詞では歌ってないことが注目される。江戸上りの踊番組というのは、薩摩藩邸に貴紳を招待しての演目とはいうものの、江戸城での演奏とは異なる。江戸城での御前演奏は明清楽が中心だが、江戸期の中頃から「今日のほこらしやや」の歌詞を三線で伴奏して歌いおさめるようになる。しかしこれがかぎやで風節で演奏されたかどうかは分かっていない。

（四）

組踊は王府の芸能ということもあって、破綻して悲劇的な結末を迎えるのはまったくない。「執心鐘入」ですら、主人公中城若松の勝利で終わるのである。『琉球戯曲集』を見ると、「護佐丸敵討」の二童は、首尾よく仇を討ち果たして、「やれこのしいぶし」で「今日のほこらしやや」の歌を歌って踊りおさめている。「忠士身替の巻」も末尾は「よしやひぶし」で、二歌詞目に「今日のほこらしやや」がある。「孝行の巻」は屋慶

名ぶしで、「女物狂」は立雲ぶしで、それぞれこの歌詞で歌い終わる。

- ・この他「義臣物語」では「きよらやふし」で「今日のほこらしやや」の歌と、琉歌集でかぎやで風節に部立される「九重の内につぼで露まちよす嬉しごと菊の花どやよる」の二歌詞歌って終わる。
- ・「東辺名夜討」では「しよんがないぶし」。
- ・多良間の「忠臣仲宗根豊見親組」は「歌」とあるのみで節名不明。この「歌」のところ垣花良香『たらましま組踊集』に「歌『かぎやで風節』（地謡人）」とあるとのこと（『多良間村史』 第5巻 資料編4 芸能）。

以上見てきたように、組踊には「かぎやで風」節はまったく使われていない。冊封使歓待の舞台には、今分かっている1800年申年御冠船以降、毎回組踊が十七番用意された。その内十五番を冊封使に提供し、七番は御膳進上といって、冊封使を無事に本国へ送ったあと、国王へ酒肴を供し芸能を演じる祝賀会があった。この御膳進上の組踊には必ず「辺戸の大主」が最初に演じられた。1800年以降、上演された組踊と御膳進上の組踊演目と、戌の冠船の時の躍奉行が所管した演習演目を含む全ての番組については国立劇場第9回琉球芸能公演「琉球王朝の芸能 戌の御冠船踊」に解説したことがあるのでここには書かないが、最後の寅の冠船（1866年）の時には「辺戸の大主」「義臣物語」「大川敵討」「久志之若按司」「二山和睦」「執心鐘入」「銘苺子」の七番だった。御膳進上ではこの「辺戸の大主」が初めに上演される決まりである。これは、既に述べた冊封使歓待の仲秋宴のときの老人老女や、長者の大主に似ている。辺戸の大主の子辺戸のひやが、

「出やうちやる者や辺戸の大主の嫡子辺戸のひや、嫡孫辺戸の子。

あゝ豊かなる御代や願事も叶て、父母の御歳や今年百二十歳。

我身や九十歳、いやあも七十になやい又居れば、

父母の御果報、我れ〜の喜び、い言葉に出ちやちも尽さらぬ。

やあ、産子、今日やよかる日よやれば、父母の百二十歳祝いぼしやの。

孫子のちや呼びよ集めやい、思い〜の芸能、踊らしやい御目かきれ。」

とあって、柳節の柳踊だけが踊られる。ついで男の子つまり若衆による「梅の花踊」で、平敷ぶしで、

梅は冬ごもり節よまちかねて 花の咲く春にあうが嬉しや

深山鶯も咲くやこの花の 匂いおくる風のたより待ちよら

二歌詞で踊られるが、この踊は残念ながら他に見られないし、現存もしていない。次いで、女踊金武節で、

首里親国習いや三味線聞きゆい なるこ声ど聞きゆる我山国や

いつも山国やなるこ声どききゆる うちならしならしとぎにしやべら

これも伝えられていないが、「鳴子踊」に縁を引いているように思われる。次も女踊、チルレン節で、四つ竹を持って踊る。

子孫揃て願たこと叶て 大主の百歳御祝しやべら

石垣の喜舎場本の 1867 年の踊番組にもあって、歌詞は「ならず四つ竹の音にまぎれてどおやぐめさあても御側よたる」とある。こちらのほうがもとの踊であろう。

次に二才踊「前の浜ぶし」、最後は辺戸の大主当人が「ハヤリグワイニヤぶし」で、左の二歌詞で踊る。

今日のいからしや踊りはね遊び 大主百歳の御祝いだいもの

今日の誇らしややなおにぎやなたてる 蒼で居る花の露いきやたごと
一番歌の下句は「首里天がなし御祝いやぐと」とあるのが元の歌で、場に合わせて改作したものであろう。そして最後はかぎやで風節で、

石なごの石の大瀬なるまでも 御かけぼしやい召しやうれ我按司加那志
で歌い踊り「辺戸の大主以下手を打ちそろいて踊りはねして内に入る」(当間清弘『沖縄郷土組踊全集』1965年再版)。この第四句「我按司加那志」は「わ御主加那志」とあるところである。「按司加那志」はどちらかと言うと、按司や王子に対する敬語、国王なら「按司おそい加那志」である。「今日のほこらしやや」の歌は「ハヤリグワイニヤぶし」で歌い、「かぎやで風節」では「石なごの石の」の歌が歌われている。これも琉歌集ではもともとかぎやで風節で歌われているもので、「君が代は千代に八千代に」という和歌に似ているが、第三句「御かけぼしやい召しやうれ」は御支配し榮えましての意で、国王にしか相応しくない。「辺戸の大主」は能で言えば脇能的なものであって、にもかかわらず、ここでは「かぎやで風節」と「今日のほこらしやや」の歌との結びつきが避けられている。なぜか。

戌の冠船の例を「躍方日記」から見てみよう。戌の冠船の時には10月20日冊封使一行が帰国している。そして後の祝いとして「御膳進上」が持たれることになり、「辺戸の大主」「執心鐘入」「姉妹敵討」「銘苺子」「本部大主」「孝行の巻」「東辺名夜討」の七番が決まる。この御膳進上のことを「諸人御膳進上」とも言って、王弟以下筑登之座敷までの「諸人」が南殿に招待され、国王から順々に盃がめぐる「大通り」(御通り)がある。女性は、聞得大君を始め王妃・王母、幼い太子らは御内原で御膳進上があり、北殿で芸能を堪能する。その後2日に別けて地方役人を招待して「躍拝見」があり、翌日在番役人を招待して同様のことが行われる。この時には「辺戸の大主」は上演されない。

御膳進上の最後は東苑・崎山の御茶屋御殿で12月5日に催された。国王を始め王妃・王母それに聞得大君も出席して、午前10時ごろから午前0時ごろまで、14時間に及ぶ長丁場の祝賀会である。次のような番組だった。

- | | | | |
|---------|-----------|-----------|---------|
| 一 入子躍 | 二 扇子おどり | 三 辺戸の大主 | 四 女笠おどり |
| 五 護佐丸敵討 | 六 二才扇子おどり | 七 久志の若按司 | |
| 八 貫花おどり | 九 姉妹敵討 | 十 若衆磨躍 | 十一 本部大主 |
| 十二 柳躍 | 十三 義臣物語 | 十四 若衆笠おどり | 十五 大川敵討 |

十六 二才磨おどり 十七 東辺名夜討 十八 唐棒 十九 まりおどり
二十 獅子舞

辺戸の大主が初番ではなく三番に上演されていることに注目すべきである。辺戸の大主は祝意を表す慶賀の組踊の一つとして上演しているのであって、仲秋宴の老人老女の例と同様とは言えない。そのことでかぎやで風節と「今日のほこらしやや」との齟齬も納得できる。三番の出物であって、長者の大主的なものとしても受け取られていない点も注意すべきだろう。かわって入子踊と扇子踊が出ている。これは仲秋宴の時の「道入子」「中入子」「長入子」「三つ入子」「道入子」「道入子」のすべてであろう。

「入子」というのはイデコ、単にデコともいい、太鼓踊のことである。最初に太鼓のリズムに合わせて踏みとどろかす入子囃子が付き、そのまま若衆踊が展開する。その最初の歌が世なをりぶしで「今日のほこらしやや」の歌と「九重のうちに」の歌で踊られる。歌意からいえばまさにここにふさわしい歌二首ではあるが、かぎやで風節と「今日のほこらしやや」の歌とは結びついていない。仲秋宴ではおもろ主取を始め翁的な者が三人も出て祝福しているので当然として、ここでは直会（なおらい）、一種の無礼講の祝賀会だったからか、かぎやで風節とはあえて結びついていない。

(五)

今日のほこらしややなをにぎやなてる 蒼でをる花の露いきやたごと

この歌を今一度吟味してみよう。「ほこらしや」の意味は伊波普猷が「歓喜に満ちた心持を誇る意」（琉球戯曲集）としているに尽きる。しばしば「嬉しやほこらしやや懐（フチュクル）にあまて」のように、「うれしや・ほこらしや」と重ねても使われる。ということは、二つはほぼ近い意味をもっているということであって、その上で「ほこらしや」には下から上を慶賀する意味もあり、一首の意味は、今日の喜びを何に譬えようか、譬えて言えば、蕾んでいる花に露が行き会ったようである、ということになる。下句の、慶賀あるいは歓喜を具体的に想像させる蕾と露の関係はどういうものであろうか。露と花の関係で言えば、どの花についても言えるのではない。唯一菊花のみが露と深く結んで慶賀を表してきたのである。「菊の露」と言えば菊花においた露のことで、飲めば長寿を保つとされる。菊のことをヤマトことばでモモヨグサ、ヨワイグサとも言うように、不老長寿の靈草だったのである。中国河南省南陽郡鄴県の山中に甘谷水があり、その川の水が甘いのは上流に甘菊が生えみな水中に落ちるからで、そのため付近の人々はみな長寿で、上は140～150歳、早死しても80～90歳だったという。仙人彭祖は白菊汁で仙薬金丹を造り700歳まで生きている。能の「菊慈童」でも菊水の水を飲んで700歳まで生きたことが歌われ、その水を天子に奉ったとある。能「養老」に「彭祖が菊の水、したたる露の養ひに、仙徳を受けしより、七百歳を経る事も薬の水と聞くものを。地「げにや薬と菊の水、その養ひの露のまに。シテ「千

年を経るや天地の、地「ひらけし種の草木まで。シテ「花咲き実なることわり」とある。こうした菊水や菊の露を反映したものは、古いところでは「懐風藻」にも見られるものの、万葉集にはなく平安以降の和歌集や物語には幅広く見れる。9月9日の重陽の節句に菊酒を飲む風習はいまも沖縄にある。「菊の綿」「菊の着せ綿」といって平安時代には、重陽の前後に菊花に被せて露の香のついた綿で拭うと長寿を保つとされた。また露は仏教で「甘露」といい印度や中国では仙人の食べ物仙薬とした。この甘露は梵語のアムルタ〈不死〉の訳語とされている。つまり菊花と露は不老不死、長寿延命の効能を持ったものとイメージされていたのである。

もっとも古い三線楽譜である「屋嘉比工工四」には、ホロホロボシ、ヨシヤイノウブシ、謝武名節、仲節で「今日のほこらしやや」の歌詞が歌われている。しかし「かぎやで風節」というのは見えない。ただ「昔御前風節」というのがある。これは稲まづん節である。これには歌詞が「鳴らす四つ竹の音にまぎれてどおやぐめさあてもお側寄たる」とある。歌謡で言う座ぼめの歌という内容である。この次に「御前風節」とある。これこそかぎやで風節である。これに「九重の内に蒼で露待ちよす嬉しごときくの花どやよる」の歌がついている。九重は九關のやまとことばで、ここでは首里城を意味する。首里城内でまさに咲こうと露を待ち受けているのは、嬉しい事（慶事）を聞くというキク（菊）の花である。菊を持ち出したところに、この歌が国王の長寿をことほぐものであることがあきらかになる。この時期まさに「かぎやで風節」こそが御前風にふさわしいものだったのである。その後、時期はいつか分からないが、「九重の」歌から「今日のほこらしやや」の歌に代わり、唯一の格式高い御前風節になった。『大島筆記』（1763年）には、この「今日のほこらしやや」の歌について「この曲はいにしへよりいはひの歌として先最初にうたふ事也。ふくらしの歌と云。国王の前などにもうたひ舞よしなり。伝信録にいはゆる太平歌は是なるべし」とある。この頃までには御前風の詞曲として格別の地位を占めたものと思われる。

東恩納寛惇の言説に触発されてここまで来たが、かぎやで風と「今日のほこらしやや」は国王専用の特別のもので、老人踊は民間になかった。長者の大主のようなものはあったのかも知れないが、ただ踊番組には記録されていない。かぎやで風節・今日のほこらしやや・初番・老人踊は、国王の臨席する場面でのみ歌い踊られ、国王の長寿延命を寿いだのである。

小説「琉球の子どもたち」とその背景

星名 宏 修

小説「琉球的孩子們（琉球の子どもたち）」は、1948年5月7日、『台湾新生報』の副刊「橋」第110期に掲載された。作者の黄昆彬は、当時台湾師範学院英語系の学生である。彼が日本語で書いた作品を、同大学の史地系に在籍していた林曙光が中国語に翻訳した。

掲載紙『台湾新生報』は、1945年10月25日に、台湾省行政長官公署宣伝委員会の機関紙として創刊された。^{〔*1〕}「光復」直後の台湾で、政令の宣伝と「祖国」中国文化の台湾への伝播を主要な任務とする新聞である。「光復」から1年後の1946年10月25日、植民地時代の「国語」であった日本語は、新聞や雑誌での使用が禁止され、日本語を創作言語としていた多くの本省人文学者は、作品発表の場を奪われてしまう。1947年の二二八事件後、長官公署が撤廃され、新たに台湾省政府が設置されると、『台湾新生報』も省政府の機関紙となり、事件で顕在化した本省人と外省人の対立を緩和すべく、副刊「橋」が同年8月1日から設けられることになった。「橋」の編集長となった歌雷（本名、史習牧）は、復旦大学新聞系を卒業し、戦後まもなく台湾にわたってきた外省人である。翻訳者を募り、日本語しか書けない本省人の作品を積極的に掲載しようとしたのである。

翻訳者の林曙光は、1946年正月に7年間学んだ京都から帰台。大中華青年公論社に勤め、中国語日本語併用の総合雑誌『曉鐘』の刊行に携わった。しかし雑誌の売れ行きが悪く、2号出して廃刊してしまう。

1947年の秋から冬にかけて、『台湾新生報』の「橋」が、植民地時代からの著名な作家楊達の座談会を開催するという記事を見てこれに参加し、歌雷と知り合いになった。中国語を書くことができた林曙光は、「台湾文学的過去、現在與未来」を投稿し、以後「橋」の翻訳者となる。原稿料は著者と折半という条件だった。交流がもっとも多かったのは、同じ台湾師範学院の学生だった蔡徳本と黄昆彬のふたりだったという。黄昆彬は台南の裕福な家庭の出身で、1948年の夏休みに歌雷らと台中、台南、高雄での文芸座談会と一緒に参加した。1949年の春に四六事件が発生すると、その学期末に黄昆彬も逮捕されてしまったという。^{〔*2〕}

〔*1〕『台湾新生報』および副刊「橋」に関しては、彭瑞金「《橋》副刊始末」『台湾史料研究』第9号、呉三連台湾史料基金会、1997年5月。および許詩萱『戦後初期台湾文学的重建——以《台湾新生報》「橋」副刊為主要探討對象』台湾・中興大学中国文学系修士論文、1999年、などを参照。

〔*2〕林曙光「不堪回首話当年」『文学台湾』第4号、文学台湾雜誌社、1992年9月。「難忘的回憶」同第9号、1994年1月。「感念奇縁弔歌雷」同第11号、1994年7月を参照。

今日確認できる黄昆彬の最初の作品は、1946年6月19日、台南で刊行されていた『中華日報』「文芸欄」に掲載された日本語小説「李太々の嘆き」である。この「文芸欄」は、戦前『改造』に掲載された「パイパイのある街」で一躍有名になった龍瑛宗が編集しており、本省人による日本語による発表の場として、戦後初期の文学状況を考える上で不可欠のメディアである。

「李太々の嘆き」が描いているのは、今日なお台湾社会に大きく横たわる「省籍矛盾」といわれる本省人と外省人の対立である。戦後、夫の転勤に随って中国から台湾にやってきた李太々は、夫のコネで不本意ながら科長にすえられ、本省人の部下とも親しくなれず、鬱屈した日々を送っている。当時大きな社会問題となっていた外省人の腐敗を扱ったこの作品は、本省人の怒りを正当なものと理解し、「純な気持で光復を祝った彼等を裏切ったのは正しく私達なのだ」と悩む誠実な外省人女性が、「台湾に真の光明が訪れるのは何時の日の事だらう?…」と疑問を投げかけるところで結ばれている。「光復」の熱気が消え、外省人と本省人の対立が先鋭化しつつあったこの時期に、本省人の作者はあえて外省人を主人公にすえ、彼女の「嘆き」を表現しようとしたのである。本省人と外省人の武力衝突となった二二八事件より8ヶ月も前に、台湾社会を蝕む問題を、黄昆彬はさりげなくスケッチしているのだ。

戦後初期のわずか3年でしかない短い文学活動のなかで、黄昆彬は「李太々の嘆き」だけでなく、敗戦後の沖縄人の境遇を描いた「琉球的子供們」や、台湾人と結婚した阿部美子の凄惨な暮らしを題材にした「美子与猪(美子と豚)」(1948年8月30日「橋」第159期、潜生記)など、台湾社会におけるマイナーな存在を描いている点が着目される。

また、太平洋戦争のさなかの1944年の夏、休暇を終えて内地の学校に戻るため基隆港から出港した台湾出身の学生たちの船が、門司港に着く直前に爆撃され沈没してしまう悲劇を、一本の雨傘をめぐる母と息子の葛藤に託して表現した「雨傘」(1948年5月3日「橋」第109期、林曙光記)は、「橋」紙上でも高い評価を勝ちえた作品である。

『中華日報』および『台湾新生報』に掲載された黄昆彬の作品は以下の通り。

- ①1946.6.19「李太々の嘆き」(『中華日報』「文芸欄」)
- ②1948.5.3「雨傘」(『台湾新生報』「橋」109期、林曙光記)
- ③1948.5.7「琉球的子供們」(『台湾新生報』「橋」110期、林曙光記)
- ④1948.8.30「美子與猪」(『台湾新生報』「橋」159期、潜生記)
- ⑤1948.9.22「野地的百合」(独幕劇)(『台湾新生報』「橋」166期、潜生記)
- ⑥1948.9.24「野地的百合」(独幕劇)(『台湾新生報』「橋」167期、潜生記)
- ⑦1948.12.17「從「卡羅馬助夫」看「失去的週末」」(論評)(『台湾新生報』「橋」195期、林曙光記)

- ⑧1948. 12. 27 「吃耳光的人」與「大馬劇団」（劇評）（『台湾新生報』「橋」197期、林曙光訳）
- ⑨1948. 12. 30 「毀滅了的偶像」（『台湾新生報』「橋」198期、潜生訳）
- ⑩1949. 2. 28 「評金玉滿堂」（論評）（『台湾新生報』「橋」218期、林曙光訳）

小説「琉球的孩子們」は、1946年の晩秋、帰郷の船を待つために台湾各地から台北に集結して来た「琉球人」の悲惨な生活をテーマにしている。^{〔*3〕} 彼らの多くは、戦争中に疎開のため台湾にやってきたのであった。

1944年7月にサイパン島が陥落した直後の7月14日、沖縄県内政部は「学童集団疎開準備ニ関スル件」を通達。宮古・八重山両郡では、支庁や町村当局が一体となって台湾への疎開が奨励された。こうして15000人から20000人におよぶ沖縄人が、危険な海を越えていった。制海権を米軍に握られている状況にあつて、この疎開は決して安全なものではなかった。例えば石垣島から台湾に向けて同時に出航した第一千早丸と第五千早丸は、敗戦を目前にした1945年7月3日に基隆沖で米軍機の襲撃を受け、多くの犠牲者を出している。^{〔*4〕} これらの疎開者を含めて、台湾からの引き揚げが、戦後に大きな社会問題となるのである。

小説の前半部で描かれている通り、日本の敗戦後、台湾における沖縄人の日々の生活は困難を極めた。従来からの居住者に加えて、戦争末期に台湾に疎開してきた者の多くは、生活力の乏しい老人や幼児であった。台湾に取り残された沖縄人は、たちまち生活の糧を失うことになる。

日本敗戦からちょうど一年経った1946年8月15日、『自由沖縄』に掲載された、「台湾に於ける沖縄人の動静」によれば、戦時中に台湾総督府が疎開者に支給していた生活費は、一日一人50銭で、一ヶ月分の支給額でさえ一日の食費にもならなかったという。しかも敗戦後は、「生活費（一日五拾銭）を昭和二十一年三月分迄纏めて支給され、其の後は外部よりの援助は殆どなく専ら自己の力による生活を営まざるを得ない」状況に追い込まれていた。ほぼ同時期の『沖縄新民報』の記事「飢餓線上にさまよふ台湾の県人を救へ 沖縄同郷会台北で活躍」においても、「現在では主食品の配給は全然なく、みな衣料その他を売り払つて僅に露命をつなぐと言つたやうな惨憺たる生活をしてゐます。（中略）このまゝにしておくくと死をまつばかり」だという切羽詰まった有

〔*3〕 引き揚げを待つ沖縄人が、台湾人と野球の対戦をしたというのは、実際にあった出来事だったようである。太田守良「思い出、あれこれ」『琉球官兵顛末記』台湾引揚記刊行期成会、1986年、42頁。

〔*4〕 大田静男「台湾疎開」、「尖閣列島遭難事件」『八重山の戦争』南山社、1996年、205～218頁。

様が報告されている。^{〔*5〕}

台湾在住日本人の第一次送還は、1946年2月から4月にかけて行われ、すでに28万人以上が引き揚げていた。しかし「台湾ニ居留シタル日本人中沖縄県民ニ付テハ計画還送ヨリ除外別途考慮セラレ日本人ノ一般還送終了後先島列島民ハ一応還送終了シタルモ沖縄本島民ニ付テハ還送スベキ方針示サレタルモ其ノ期日ハ未ダ不明ナリ」^{〔*6〕}という状況であった。台湾各地に居住していた沖縄人は、日本人（「日僑」）とは区別して「琉僑」と呼ばれ、「旧総督府庁舎ニ収容官兵ト共ニ管理セラルルコトナ」^{〔*7〕}る。もともと、八重山・宮古出身者のなかには、密航船をチャーターしたり、地元自治体が予算を組むなど、様々な手段ですでに故郷に引き揚げていた者も多く存在したのである。^{〔*8〕}

こうした事態は、沖縄戦による郷土の荒廃と米軍の占領という、引揚者を受け入れる沖縄側の事情もさることながら、沖縄人は「日僑」とは異なる存在であるという、中国側の認識によるところが大きい。「琉球的孩子們」が「同じように漢民族の血を引いたお前たち」への語りかけで結ばれているように、沖縄人は日本人とは異なり、中国人／台湾人との特別な繋がりがあるものと考えられていた（小説には「本省人が彼らを日本人とは見ておらず」という記述もある）。

植民地時代の台湾で、「日本人」から差別された沖縄人は、しばしば中国人との類似性を取りざたされてきた。例えば戦後の石垣島で刊行された雑誌『八重山文化』で、沖縄人の植民地体験を描いた小説「人間の壁」には、次のような一節がある。

「いや、とにかく、琉球人は、支那人に近いかも知れんよ」と大きい方はいつた。「ほら、この前、うちの役所の地方課にはいつた、石■という若い奴がいるだらうあれなどは、履歴書に、沖縄の中学を卒業したようなことは書いてあつたが、電話ひとつかけきれないんだからね。電話の相手の話もよくききとれないし、また、奴さんの言葉も相手にわからないといつた具合でさつぱり電話の要領を得ないんだよ。課長は毎日こぼしているよ。」「あいつらに出来るのは、チャンチュウのような強い泡盛をのむ位だよ…とにかく野ばんだな」そういつて、二人は声立てて笑い出

〔*5〕「飢餓線上にさまよふ台湾の県人を救へ 沖縄同郷会台北で活躍」『沖縄新民報』1946年5月5日。

〔*6〕「沖縄本島民ノ還送用配船ニ関スル件」『留台日僑会報告書 第四報』1946年5月24日。『台湾引揚・留用記録 第一巻』ゆまに書房、1997年、137頁。

〔*7〕「沖縄県民ノ状況ニ関スル件」『留台日僑会報告書 第五報』1946年6月6日。同上156～157頁。

〔*8〕「春の新生八重山に自主再建の狼火 沖縄八重山宮良支庁長の初便り」『沖縄新民報』1946年3月25日、第6号には、以下のような記述がある。「台湾より帰る八重山郡民は軍官の命令により、台湾へ主として疎開したが敗戦の結果、台湾にも身の置きどころが無くなり救いを求める悲報が続々として伝えられたのでこれが救出を急ぐこととなり応急措置として先づ石垣町有財産を処分して旅費を調達し船をしたてて疎開者の九十五％を迎へることに成功した」。

した〔*9〕

また 1940 年に沖縄を大きく揺るがせることになる「沖縄方言論争」のなかで、評論家の杉山平助は沖縄人の話す言葉を、「日本人としてあんな言葉を使つて、将来生きてゆくことは、恐るべきハンデイ、キヤツプ」とした上で、「アクセントは支那人の日本語に近く、そのため我々との接触到、れきれきとヒケメを感じてゐることが看取される。いはんや一般民衆の会話など、チンプンカンプンで秋田や青森等と比較されるべきものではない。琉球はただでさへ、生産力に乏しく民度低く見るからに痛々しい島である。その上あんな言葉の重荷を背負つてゐたのでは、その意図する県外発展の領域でも、深刻に不利たることを免れまい」と決めつけている。〔*10〕

小説「人間の壁」における、「琉球人は、支那人に近いかも知れんよ」という台詞は、沖縄人の言葉を「支那人の日本語」になぞらえる杉山の感覚からそれほど離れてはいない。そして戦前において日本人が「支那人」に対して抱いていたイメージは、基本的にネガティブなものであったことは、周知の通りである。

このように沖縄人と中国人との類似性をめぐる言説が、両者への差別意識から日本人によって反復されていた。しかし中国／台湾の側は、こうした意識からとりあえずは切り離されたところで、互いの歴史的な関係（沖縄は中国の領土であるという認識も含む）から、沖縄人は日本人ではないと見なしていたのである。植民地において、自己を「日本人」だと強く意識していたにもかかわらず、日本人からの差別的なまなざしにさらされていた沖縄人にとって、中国側のこのような対応は、非常に印象深いものだった。〔*11〕

例えば嘉義の郵便局で働いていた宮古島出身の平良新亮は、1944 年に補充兵として入隊。敗戦後にもとの職場に戻ろうとしたところ、「沖縄の人は強制引揚げではないから、働きたかったら、琉球人として居残っていい」と台湾人に言われたという。〔*12〕また新竹で終戦を迎えた与那嶺栄幸も、敗戦後は日本人と沖縄人、台湾人の居住地域

〔*9〕 中間英「人間の壁」第三回『八重山文化』八重山文芸協会、1948 年 7 月。小説には、「沖縄人に対する、こうした侮辱は、日本人からも、台湾人からも、永正（主人公の名前、引用者）の長い殖民地生活の中にはいくらかあつた」と書かれている。

〔*10〕 杉山平助「琉球の標準語」『東京朝日新聞』1940 年 5 月 22 日。この文章は「琉球の標準語問題」というタイトルで、八重山の新聞『海南時報』にも転載された（1940 年 6 月 11 日）。

〔*11〕 『自由沖縄 九州版』第 2 号（1946 年 6 月 25 日）には、「琉球人は朋友 好意示す台湾人」という記事が掲載されている。同紙主幹仲宗根朝松の手記という形をとったこの記事は、敗戦後の台湾人の沖縄人に対する対応を、「こういふ乱世にあつても沖縄人に対しては珍しいほど好意をもつてくれた“琉球人だ”と名乗れば“おゝ琉球か、琉球人はわれらの朋友、あなた方は台湾にゐてもゐゝよ”と握手する」と伝えている。

〔*12〕 平良新亮「台湾で補充兵となる」『平良市史 第四巻資料編二』平良市役所、1978 年、551～559 頁。

はそれぞれ別に設定され、沖縄人であるということで優遇された、と回想している。^{〔*13〕}

もちろん沖縄人すべてが、中国人／台湾人から同胞扱いされていたわけではない。大日本婦人会石垣支部長として台湾疎開を先導した宮城文は、敗戦の翌日に、親しくつき合っていた台湾人の態度が一変し、「琉球ラー何日帰るか」と詰問されたと記憶している。^{〔*14〕}山城ミエも、8月15日を境に台湾人が豹変し、これまで雇っていた台湾人から、「これからは、私どもがあなたたちを使うよ」と言われたという。^{〔*15〕}また台湾人作家鄭清文の小説「三脚馬（三本足の馬）」はフィクションではあるものの、敗戦後に「琉球出身の巡査」が台湾人による復讐の対象になったことが、さりげなく書き込まれている。^{〔*16〕}

ところで引き揚げを待つ沖縄人自身によって作成された「沖縄籍民調査書」（1946年6月）によれば、帰還を待つ「沖縄籍民」は全部で10132人。その生計状態は、「多数ノ家族ヲ擁シテノ高物価生活ニ衣類其ノ他残余ノ家財ヲ生活費ニ消費シ其ノ生活状況真ニ逼迫ノ極ニ達シ困窮者続出」し、「残留者ノ大部分ハ右ノ如キ生活ニ依リ帰還実現ヲ願望シツヽ辛シテ維持シ居ル状態ナル為營養方面ニ於テハ之ヲ採ルニ術ナク現在ノ失職者ニ於テハ肉食等思ヒモ依ラズ（豚肉一斤九〇円、牛肉三五円）随テ營養底下シテニ学校児童或ハ小兒等ニ營養不良者多数有ルハ遺憾トスル処ナリ カロリーハー〇〇〇カロリー程度ナリ」^{〔*17〕}と報告されている。

劣悪なのは栄養状態だけでなく、住環境も悲惨なものであった。宿舎としてあてがわれていた「旧台湾総督府跡庁舎ト台北市水道町ノ市営住宅」は、「爆撃ノ為破壊箇所多数ニシテ降雨シタレバ各室共雨漏レ多ク且ツ火災ノ為舎内ノ建具全焼シ風雨吹き流シノ儘ニシテ「コンクリー」へ直接筵ヲ敷キアルハ保健衛生上甚ダ寒心ニ堪ヘズ」。実際に「感冒」や「マラリヤ」など何らかの疾病を抱えている者は、全体の54%にも及んだという。^{〔*18〕}

このような生活を送りながら、一足先に引き揚げていく日本人を、日々見送らねばならなかった沖縄人が綴った詩を紹介しておこう。

〔*13〕 与那嶺栄幸「台湾での軍隊生活」『西原町史 第三巻資料編二』西原町役場、1987年153～159頁。同じ回想のなかで、戦争に負けたのは沖縄に多くのスパイがいたためだと日本兵に言われ、与那嶺は大きなショックを受けている。

〔*14〕 宮城文「惨めな境遇の台湾疎開」『市民の戦時・戦後体験記録 第二集』石垣市役所、1984年90頁。

〔*15〕 山城ミエ「敗戦を台湾で迎えて」同上96頁。

〔*16〕 星名宏修「交錯するまなざし—植民地台湾の沖縄人はいかに描かれたのか」『野草』第64号、中国文芸研究会、1999年8月を参照。

〔*17〕 「沖縄籍民調査書」『琉球官兵顛末記』、312～313頁。

〔*18〕 同上318頁、352頁。

「船は行く」

昨日も今日も いとしの同胞は／喜びの声を 我々の置土産に／船に乗込む
昨日は彼の友 今日此の友／続々と我が身辺より 友は離れ行く
昨日迄 共に寝起きをした友も／今日は淋しき 船上の人かな
思ひ出す 帰りし我が友 今何処／何時再びか 会える事やら
元気でね サヨナラよと 云ひ交す／見送る我も 送られる彼も
今日も亦 船は出て行く 基隆を／見送る我等 何時帰れるやら
噫々社会の片輪者、我儘でも言うて見たい^{〔*19〕}

台北に集結した沖縄人は、県人会組織の「沖縄同郷会連合会」と連繋して「沖縄僑民総隊」を編成。同隊は、初等・中等教育を担当する教育部や、医療を担当する医務部を含む6つの部門からなり、引き揚げまでの不自由な日常生活を全面的にバックアップした。^{〔*20〕}

沖縄人が台湾から引き揚げたのは、日本人の送還から半年以上遅れ、1946年10月に入ってからであった。11月20日付『留台日僑会報告書 第十報』には、「在台琉僑ノ還送ニ付テハ留台日第八報既報ノ通り盟軍司令官ヨリ配船セラルルコトト決定シ居リタルトコロ十月十六日ニ至リLST型輸送船ヲ以テ十月二十四日ヨリ還送ヲ開始スル旨ノ通報ヲ受ケ之ガ実施ニ着手スルニ至リタル（中略）概ネ順調ニ進行シ現在迄ニ還送セラレタル」^{〔*21〕}と記されている。12月27日の『留台日僑会報告書 第十三報』によれば、「沖縄籍民ノ還送ハ其ノ後順調ニ進行シテ十二月二十三日ヲ以テ終了」し、その「還送人員」は9928人であったという。^{〔*22〕}

台湾からようやく引き揚げることのできた沖縄人を待っていたのは、戦後の厳しい生活であった。財産のほとんどを失った引揚者が、なんとか持ち帰ることのできた現金が無効とされたことも、大きな打撃となった。^{〔*23〕}

〔*19〕 繁夫「船は行く」「台北集中営々内誌」同上 379～380頁。なお文中の「／」は改行箇所。

〔*20〕 田里維成「四十年前の台北集中営の思い出」『琉球官兵顛末記』265～266頁。なお田里維成は注17の「沖縄籍民調査書」を執筆した人物である。

〔*21〕 「琉僑還送ニ付テ」『留台日僑会報告書 第十報』1946年11月20日。『台湾引揚・留用記録 第三巻』62～65頁。

〔*22〕 「沖縄籍民ノ還送ニ付テ」『留台日僑会報告書 第十三報』1946年12月27日。『台湾引揚・留用記録 第四巻』203～204頁。

〔*23〕 基隆港で日本への引揚者を送還する業務に携わった比嘉賀友によれば、先島方面には日本本土と同じ船で引き揚げが可能であったが、台湾に長く住んでいた人の高価な荷物に対して、沖縄からの疎開者の哀れな姿が対照的で、所持品も使い古されたタライや鍋、釜などを後生大事に抱えていたという。比嘉賀友「薬と兵隊回想記」『琉球官兵顛末記』128～129頁。

なお1947年6月13日『うるま新報』に掲載された「交換はダメ！！台湾引揚者の旧円無効」によれば、「台湾よりの引揚者が持参した旧円及び台湾銀行発行券は相当の額にのぼるものとみられており 交換未払のため一時は全員無償で配給を受けその後就職■により生活能力なく且扶養者なき者の外は逐次救済より除かれていた現状でありその新円交換の払

また植民地帰りの人々を見つめる周囲の視線も冷ややかであった。1946年の秋、雑誌『八重山文化』に掲載されたコラムには、「植民地帰りの娘が、色とりどりの大柄着物に白タビのイデタチで町を歩」く姿を、「チンドン屋のやうだナアー」と「子供」の声によって表現している。戦前、「高貴の姫様の様な身なりをしていらしやる」^{〔*24〕}と揶揄されながらも、都会生活へのあこがれをかき立てる存在であった彼女たちの身なりは、「ゼイタク、不潔、不健康、鈍愚、醜悪、低脳」と罵られ、「植民地の風俗は放任、無批判、無節操」だと決めつけられたのである。^{〔*25〕}しかし『八重山文化』にはこうした批判だけではなく、彼女たちが自らの侘びしい生活を題材にした短歌もいくつか掲載されている。高江洲八重子の連作「つれづれに」から、何首かピックアップしてみよう。

台湾の土地をはなれて一年の日は流れ去るこの島に来て
わが性は悲しきものかさまざまにみだれる心扱ひかねむ
母とわれ涙流してこらへきし日の幾度か人の心に
さまざまに変わり行く身よ行先よ憂き事あれど強く生きてよ
こみあげる心語らむ友も無く一年過しぬミシンを踏みて
春来り君とまみえる時あらば何と告げようこのこしかたを
幸のおとづれ待ちしこの我に世のなりはいの余りに悲し
月の夜に琴つまびきし我なるに今の生活は家も地もなし^{〔*26〕}

台湾における優雅な生活と対比したとき、「家も地も」ない現在の暮らしは、いかにも惨めなものであった。また植民地支配の終焉は、生活の激変だけにとどまらず、親しい人間関係を引き裂くことも意味していた。おそらくは敗戦後の混乱のなか、行方もわからなくなった友人を懐かしむ「友と別る」と題する短歌——未来をば楽しく語りて別れたる友は何処か白雲の峯——を、成底秀子は詠っている。^{〔*27〕}「あこがれの

戻しは引揚者全員が一日千愁の想いで待ちこがれていたところであるが軍政府では六月四日知事宛に右新円への交換は認可されない旨指令を発した」という。しかも「法定貨幣にあらざる右の貨幣を所持することは既報の貨幣に関する特別布告の違反となり特別軍事法廷で定罪の上処罰されるので所持者は来る六月三十日までに民政府財政部長に納入せねばならぬ」ものとされた。

〔*24〕「南門街に於ける八重山乙女の行進曲——台湾土産は可愛坊や——」『先嶋朝日新聞』1929年6月20日。

〔*25〕「ジープ」『八重山文化』1946年9月。

〔*26〕高江洲八重子「つれづれに」『八重山文化』1947年6月。

〔*27〕成底秀子「友と別る」『八重山文化』1947年2月。成底は同号の『八重山文化』に、台湾からの引き揚げ体験を描いた以下の3首の連作「基隆港にて」も発表している。

手を挙げて調べられ居り悲しくも敗戦の吾つゝましく伏す
戦ひに負けし吾等の悲しみを笑ふ如くに日はかげりゆく
春光の波に輝く岸壁に艦は浮かびて日は静かなり

台湾での生活」は、多くの沖縄人にとっては、このようなかたちで終わりを告げたのである。

(本論は、人文書院より 2002 年に刊行予定の『複数の沖縄』所収論文「植民地は天国だった」のか——沖縄人の台湾体験」の第 3 章「引き揚げ——「琉球的孩子們」」をもとに、加筆したものである。)

「琉球の子どもたち」 黄昆彬作・林曙光訳

(『台湾新民報』1948年5月7日、副刊「橋」第110期より)

民国35年(1946年)の晩秋、故郷に帰る船を待つために、全省各地から琉球人が台北に集結していた。彼らの多くは、戦争中に日本政府の強制的な疎開政策によってやって来たのだった。このため敗戦後の日本人の中でも、彼らの身なりはとりわけ惨めなものであった。

戦争の苦しみをなめつくした彼らが、生活費を稼ぐには、労働力のほかに何も売るものが無くなっていた。彼らに割り当てられた宿舎といえば、大学の近辺の豚小屋のような陋屋で、毎日ごくわずかな配給によってようやく生活を維持していたのだった。しかしこのような惨憺たる集団生活も、苦しみを克服しようと助け合うことで、かなりましなものになっていたのである。悲惨な境遇のなかでは、相互扶助の精神がいかにも大きな効果を持っているかは、経験したことのない者には想像もできないだろう。朝夕二度の点呼の時に、男たちの荒々しい声に混じって、女と子どもたちの天真爛漫な声を耳にすると、彼らはこのような状況でさえ、生きることの喜びを享受しているのだろうか、訝る人もいるかもしれない。その通りだ。あのぼろぼろの服、くたびれた帽子、数家族が一緒に生活している陋屋。これらすべてが彼らの幸福を形づくっていたのである。しかし彼らの集落には、まごうことなく沈痛なる悲劇の兆候が漂っていた。口には出さないが、おそらく誰もが、彼らの前途には更に過酷な運命が待ち受けていると考えていた。「忍び難きを忍ぶ」というスローガンからも、彼らの悲痛な決意を読みとることができるのだった。

朝の点呼が終わり、お粥をすすってしまおうと、子どもと医者と料理人を残して、働ける者はみな、仕事を求めて街へとくりだして行く。しかしこれには確かに危険も伴っていた。なぜなら彼らを待ち受けていたものは、不当な侮辱と悪意だったからである。これらに出くわさなかったとしても、革新的な雰囲気満ちた台北や、光復の喜びに陶酔した台湾人を見るだけで、彼らは悲哀を感じないではいられなかった。なぜなら彼らの感情には、当然ではあるが孤児のような嫉妬と悲哀が、幾分か入り混じっていたからである。日が暮れて、遙か彼方に煌めく金星が帰路を照らす頃、彼らの心のなかには、きっと郷愁の念でいっぱいだったに違いない。また諸行無常の寂しさに心を揺さぶられていただろう。

しかし、その日はどうしたわけか、私たちは街で琉球人の姿を見ることができなかった。日差しは茄苳とシュロの葉をじりじりと焦がすように照りつけていて、あまりにも強烈なため眼が痛くなるほどだった。乾いた空気には、窒息しそうな草いきれが漂っていた。延平路と古亭町の一帯で、いつも見かける米売りの女も見かけないし、中山路で草刈りをしている者たちも、どこへ行ってしまったのだろうか。これはいった

いどうしたとか。まさか涼を求めて草山に出かけたわけでもあるまいし。

実は、その日、琉球人は老いも若きもみな中山公園に集まっていたのだ。××新聞社主催の野球の試合に、彼らも参加していたのである。今日の試合に参加するために、彼らは一ヶ月も前から結束して努力してきたのだ。当初、こうした活動に参加することに対しては、強硬な反対意見があった。現在の境遇を考えれば、おおっぴらな活動に参加することは、誤解を招きかねなかったからである。しかし本省人が彼らを日本人とは見ておらず、しかも常々彼らに対して同情的であったので、本省人の好意を得るためにも試合に参加しようと、大多数の意見によって決まったのである。

果たして、××新聞社も彼らの申し込みを歓迎した。すぐに9名の選手が、数百人のなかから選抜され、猛烈な練習が始まった。選手たちは仕事を免除されただけでなく、よりましな家を与えられた。みなは選手たちに少しでも多く食べさせるために、自分たちの食事を減らしさえたのである。選手たちも仲間の期待に応えるために、懸命に練習した。こうして集落全体に活潑な雰囲気がうまれたのである。彼らには、勝利を期待する幻想しか存在しなかった。しかしこの点に関しては、ある種のよくない予感もあって、そのため誰もあえて口にしなかった。

午後4時に××会社との第一回戦が始まった。彼らの小さな体は、それだけで相手チームに圧倒されていた。とりわけぼろを着た応援団は、××会社から一層軽蔑と嘲笑を招くことになった。しかし彼らにはそれなりの自信があったため、全く気にすることもなく、持てる力を十分に発揮し、7回まで0対0のまま試合は進んだ。だが次に琉球人チームが守備に着いたとき、突如形勢は一変した。××会社の攻撃は二死満塁、ワンツー。××会社チームは盛り上がり、次に主審がボールと判定したとき、相手チームの喜びは頂点に達した。

「おい、ピッチャー、腹が減っているのか？がんばれよ」嘲笑を含んだ声が一度にあがった。その時、観客席で小さな事件が起こり、熱狂的な群衆は、一時静まりかえった。投手の弟で、今年13歳になったばかりの慎吉が、侮辱に耐えきれなくなって、嘲笑していた××会社の人に抗議をするため、立ち向かっていったのである。だが彼はあっけなく地面に押し倒されてしまった。これを見た琉球人は全員が顔色を変え、一斉に立ち上がったが、責任者が仲裁に立って、事態が大きくなることは免れた。だがこの事件は、琉球の選手たちにとって致命的な打撃となった。投手は戦意を失い、試合に惨敗してしまったのである。

暮色迫る中山公園には悲痛感が漂っていた。蛍が木々の間を飛び交っている。観衆が帰った後、琉球人たちは投手とその弟を囲んで、声を立てずにすすり泣いていた。

ああ、琉球の子どもたちよ！お前たちは何処へ行こうとするのか？同じように漢民族の血を引いたお前たちを、正しい道へと導いてくれるモーセは、一人もいないというのだろうか？